

『封神演義』四雪草堂系版本三種について

岩崎, 華奈子
九州大学大学院人文科学研究院 : 助教

<https://doi.org/10.15017/4763189>

出版情報 : 中国文学論集. 50, pp.130-148, 2021-12-24. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

『封神演義』四雪草堂系版本三種について

岩 崎 華奈子

はじめに

明代の小説『封神演義』の現存最古の版本は、日本の内閣文庫（国立公文書館）に蔵される金閻舒氏刊本（以下「舒本」と呼称）である。該本は『古本小説集成』第四輯（上海古籍出版社、一九九二年）に影印が収められる^①ほか、国立公文書館デジタルアーカイブ（<https://www.digital.archives.go.jp/>）においても鮮明なデジタル画像が公開されており、比較的容易にその本文や図像を見ることができるといえる。このような環境の整備によって、国内外を問わず舒本を参照することが可能となり、二〇一七～二〇一八年にはこれを底本とした日本語完訳も刊行された^②。

舒本は現存最古という点で間違いなく重要な版本である。しかし、該本は中国において伝存しなかった。日本へ舶載され江戸幕府の紅葉山文庫に収められなければ失われていたであろう。中国で通行したのは、いわゆる「四雪草堂本」と呼ばれるテキストであった。「四雪草堂」は明末清初の文人楮人獲（一六三五^③？）の室名である。康熙三十四年（一六九五）の楮人獲序を有する（および封面に「四雪草堂本訂証」と記す）版本が、一般に「四雪草堂本」や「四雪草堂刊本」、「四雪草堂訂正本」などの名称で呼ばれている。尾崎勤氏によれば「管見の限りでは清刻のすべての繁本と一部の簡本が彼（筆者注…楮人獲）の序を有する^④」という。また一九五五年に作家出版社より刊行された排印本も「比較的整っている清初の四雪草堂刊本を底本とした^⑤」旨を述べている。つまり清代から現代に至るまで読み継がれてきた『封神演義』は、すなわち「四雪草堂本」だったのである。本小説の宗教や文化に与えた影響を考え

【表1】『封神演義』の木版本

(中塚亮「封神演義の版本について」に基づき作製)

| 分類名 | 繁／簡 | 図像の種類 | その他の情報 |
|--------|-----|-------|----------|
| 二十巻本A① | 繁 | 場面 | 「舒本」 |
| 二十巻本A② | 繁 | 場面 | 「影舒本」 |
| 二十巻本B | 繁 | 場面 | 袖珍本 |
| 不分巻本 | 繁 | 場面 | |
| 十九巻本① | 繁 | 場面 | 原刻本 |
| 十九巻本② | 繁 | 人物 | 重刻本 |
| 二十一巻本 | 不明 | 不明 | |
| 巻数不明 | 不明 | 不明 | |
| 十巻本A | 簡 | 上図下文 | 無窮会織田文庫蔵 |
| 十巻本B | 簡 | 場面 | |
| 十巻本C | 簡 | 人物 | |
| 八巻本A | 簡 | 場面 | |
| 八巻本B | 簡 | 人物 | |
| 八巻本C | 不明 | 不明 | |

いて「(以下「中塚氏資料」と呼称)であろう。大塚秀高『増補中国通俗小説書目』(汲古書院、一九八七年)や尾崎勤「『封神演義』の簡本について」(『汲古』第五十一号、二〇〇七年)、その他の諸先行研究を総合し、各版本を、巻数・本文の繁簡・図像の種類という三つの観点から分類・リスト化した資料である。行款や寸法などの情報は省略されているものの、版本の種類と所蔵場所がわかりやすく示されている。そのうち木版本のみを対象とし、さらに簡略にまとめたのが【表1】である。ここから、文簡本や袖珍本、場面図ではなく人物図を掲載するといった後

『封神演義』四雪草堂系版本三種について

れば、普及を担った本テキスト群の意義は大きい。

ただし、その中には刊行時期だけでなく、巻数や行款、寸法の繁簡すら内包されている。そこで本稿は、比較的早期に刊行された可能性の高い、文繁本の「四雪草堂本」を三種取り上げ、本文校勘を通して各本の特徴や関係性について考察を行う。「四雪草堂本」という通称で一括される版本群の実態を明らかにし、長期間・広範囲に流布した『封神演義』テキストの源流を探る手掛かりを得たい。

なお、本稿は全百回のうち第一〜五十回を対象とした(理由は後述)。全体の半分に当たる経過報告であることを、あらかじめお断りしておく。

一 『封神演義』文繁本の分類

本稿執筆時点において、『封神演義』の版本の種類と所在を最も簡潔に整理しているのは、中塚亮「封神演義の版本につ

本の版本の特徴を持つものや、明らかに後印本・重刊本などを除外すると、二十卷本A①、二十卷本A②、不分巻本、十九巻本①が残る。このうち明刊とされる舒本以外の三種が、比較的早期の清刊本と考えられる。

本稿では次のテキストを使用する（「」内は本稿における呼称）。

二十巻本A①——内閣文庫蔵金閻舒氏刊本〔舒本〕

十行二十字。封面右欄に「批評全像武王伐紂外史」、中央に「封神演義」と題し、左欄に「金閻書坊舒冲甫識」と署する識語がある。李雲翔序。図像は五十葉百幅、図題を匡郭内に記す。巻二巻頭に「鍾山逸叟許仲琳編輯／金閻載陽舒文淵梓行」とある。本文対比の際は「舒」と略称する。

二十巻本A②——フランス国家図書館蔵本〔清籟閣本〕

十行二十字。封面の匡郭上に「四雪草堂訂証」と横書し、匡郭内右に「鍾伯敬先生原本」、中央に「封神演義」、左下に「清籟閣藏板」とある。康熙三十四年（一六九五）の褚人獲序の後に「封神演義原序」と題する周之標序を掲載。図像は舒本と同じ五十葉百幅だが、図題は匡郭外に記し、また九葉裏に「葑谿馬良御鑄」、四十三葉表に「康熙甲戌年壬申月葑谿馬良御鑄」と刻す。全体的に舒本と酷似するが、舒本巻二巻頭の「金閻載陽舒文淵梓行」を「竟陵伯敬鍾惺批評」に作る。本文対比の際は「清」と略称する。

不分巻本——ハーバード燕京図書館蔵本〔本衙蔵板本〕

十行二十二字。封面の匡郭上に「四雪草堂訂証」と横書し、匡郭内右に「鍾伯敬先生原本」、中央に「封神演義」、左下に「本衙蔵板」とある。褚人獲序および周之標「封神演義原序」を掲載。図像は五十葉百幅、図題の位置や画工記名は清籟閣本と同様。本文対比の際は「衙」と略称する。

十九巻本——九州大学附属図書館浜文庫蔵本〔浜文庫本〕

十一行二十四字。封面の匡郭上に「四雪草堂訂証」と横書し、匡郭内右に「鍾伯敬先生原本」、中央に「封神演義」とある（左下は空欄）。褚人獲序。図像は五十葉百幅、図題の位置や画工記名は清籟閣本と同様。本文の版心下段に「四雪草堂」と刻するが、第五十一回以降は空欄になっている。本文対比の際は「浜」と略称する。

【表2】に各本の書誌情報を簡潔にまとめた（舒本以外の三本を「四雪草堂系諸本」と総称する）。いずれの版本

にも刊行年の記載はない。ただし四雪草堂系諸本は康熙三十四年の褚人獲序のほか、画像に見える「康熙甲戌年壬申月」から、康熙三十三年（一六九四）の陰曆九月以降の刻本であることがわかる。また、四雪草堂系諸本の封面は、版面がほぼ同一である。紙面の都合により清籟閣本のみだが【書影】を掲載する^①。

二 四雪草堂系諸本の問題点

清籟閣本は舒本と極めてよく似た版面をもつ。中塚氏資料や、それが基づいた尾崎氏の前掲論文はこれを「影舒本」と称し、舒本の覆刻と見なしている。たとえば舒本に版木の断裂痕がある箇所は、清籟閣本においても字間がやや開いているなど、舒本を版下で使用してかぶせ彫りを行ったかと思しい形跡が数多く見られる。しかし舒本の完全なコピーという訳ではなく、少なからぬ箇所文字に修改が加えられている。

序文に着目すれば、清籟閣本と本術蔵板本が、褚人獲序の後に周之標序を「封神演義原序」（傍点は筆者による）

【表2】舒本および清初刊四雪草堂系諸本の書誌

| 中塚氏資料における分類名 | 本稿の呼称 | 行款 | 画像 | 序文 |
|--------------|-------|---------|------------------|--------------------------|
| 二十巻本A① | 舒本 | 十行二十字 | 五十葉百幅 | 李雲翔序 |
| 二十巻本A② | 清籟閣本 | 十行二十字 | 五十葉百幅、 画工記名あり | 康熙三十四年 褚人獲序、 周之標原序 |
| 不分巻本 | 本術蔵板本 | 十行二十二字 | 五十葉百幅、 画工記名あり | 康熙三十四年 褚人獲序、 周之標原序 |
| 十九巻本① | 浜文庫本 | 十一行二十四字 | 五十葉百幅、 画工記名あり | 康熙三十四年 褚人獲序 |

『封神演義』四雪草堂系版本三種について

【書影】清籟閣本封面



以下同)と題して掲載する共通点を持つ。本衙蔵板本は「衙」が役所を意味するため官刻かと疑いたくなるが、実はこの「衙」に官署の意味はない。先行研究によつて、「本衙蔵板」と掲げる版本は明万曆〜清光緒間の刊本に見られ、官刻・家刻・坊刻いずれの可能性もあり、かつ大半が家刻か坊刻であると明らかになっている^⑩。これを踏まえれば、『封神演義』本衙蔵板本は家刻⇨楮人獲刊本という可能性も浮上する。

浜文庫本は先述の通り版心下段に「四雪草堂」と刻する。版心下段の文字は一般に刊刻者名と見なされる。大塚氏『増補中国通俗小説書目』が該本(十九卷本)を「四雪草堂原?刊本」とするのもこれによるであろう。楮人獲の編纂した章回小説『隋唐演義』にも、同じく版心下段に「四雪草堂」と刻する版本がある。ただし、『隋唐演義』は楮人獲序の後に「隋唐演義原序」と題する林瀚の序を掲載するが、『封神演義』浜文庫本には楮人獲序しかない。楮人獲序とともに周之標「封神演義原序」を載せる清籟閣本や本衙蔵板本の方が、この『隋唐演義』の構成に近いと言える。

書誌情報のみをたよりに、版本の特徴や継承関係を考察することには限界がある。一層の解明を目指すならば、やはり本文の校勘が必要である。

三 各本の特徴と関係性

今回、舒本と清籟閣本・本衙蔵板本・浜文庫本について、第一〜五十回の校勘を実施した。第一章で述べたとおり、浜文庫本の版心下段に「四雪草堂」と刻されているのは第五十回までである。第五十一回以降も、行款や刻字に大きな差違は見受けられないが、異版の可能性もあるため、検討範囲から除外した。

そもそも、『封神演義』には版本間でほとんど差違がない、と言われてきた。確かに『三国志演義』や『水滸伝』のような、ストーリー展開に関わるほどの違いは見られない(文繁本・文簡本の違いは措く)。しかし、一つ一つの文字に着目すれば、舒本と他本の間には、微細とは言え数多の異同がある。しかも版本ごとに一定の特徴や傾向が窺われることが分かった。

先に舒本と四雪草堂系諸本の差違を簡単に述べておきたい。異同の多寡については、浜文庫本が最も多く、本衛藏板本がこれに次ぎ、清籟閣本が最も少ない。清籟閣本はおそらく舒本を版下に用いているために、字数の増減を要する修正がほとんど無く、また舒本の誤字・俗字をそのまま継承する箇所も多い。本衛藏板本と浜文庫本は、舒本との異同が両本間で一致することが多く、本文や回末批評の一部を削減することもある。

以下に異同の様相を例を挙げて確認していきたい(断りのない限り、傍線・傍点や句読点は筆者による。○内は舒本の該当箇所)。

(一) 四雪草堂系諸本の修訂例

まず、代表的な修訂の例を挙げる。

例1 第二回(巻一16bL4)

舒 .. 叫左右、「取文方四寶來、題詩在午門牆上、以表我不不朝商之意。」

清 .. 叫左右、「取文房四寶來、題詩在午門牆上、以表我不不朝商之意。」

衛・浜 .. 叫左右、「取文房四寶來、題詩在午門牆上、以表我永不朝商之意。」

冀州侯の蘇護が、殷への反意を表す詩を午門に書き付けようとする場面である。本衛藏板本・浜文庫本は舒本の「文方」を「文房」に、「不不」を「永不」に改める。清籟閣本も「文房」に修正するが、「不」の衍字はそのままになっている。

このような誤字・俗字・音通字の訂正は各所で見られ枚挙に暇がなく、四雪草堂系諸本の間で同じ修訂を行っている箇所も多い。が、おおむね本衛藏板本・浜文庫本の方がより徹底しており、清籟閣本は遺漏も少なくない。

次の例は、司天台(天文官)の杜元銑が紂王に提出した、好色を戒め、朝政に励むよう諫める上奏文である。

例2 第六回(巻二4bL2~4)

舒 .. 陛下貪戀美色、日夕歡娛、君臣不會、如雲蔽日。何日得視歌喜起之隆、再見太平天日也。

清 .. 陛下貪戀美色、日夕歡娛、君臣不會、如雲蔽日。何日得視歌喜起之隆、再見太平天日也。

『封神演義』四雪草堂系版本三種について

衛・浜・陛下貪戀美色、日夕歡娛、君臣不會、如雲蘇日。何日得觀廣歌喜起之隆、再見太平天日也。

舒本に小字双行で「廣觀」と作る箇所を、他本では「親廣」に改める。「親」は見る、「廣」は続けるの意で、「何日得觀廣歌喜起之隆、再見太平天日也（何れの日か廣くぎて喜起を歌うことの隆みなるを觀、再び太平の天日に見ゆるを得んや）」が正しい語順である。この部分は「尚書」虞書「益稷」を典故とする。帝舜の「股肱喜哉、元首起哉、百工熙哉」という歌に、皋陶が「乃廣載歌（乃ち廣くぎて歌を載し（＝唱和し））」、「元首明哉、股肱良哉、庶事康哉」と歌った、という記述に基づき、紂王に君臣間の協和を求める表現である。舒本はおそらく元々「廣觀」二字のいづれかを脱しており、それを小字双行によつて補刻したが、その際文字の左右を誤ったのであろう（つまり舒本も初刻本ではない）。これを版下に用いた清籟閣本は、小字双行のまま左右を入れ替えるという細かな修正を施す。本衛藏板本・浜文庫本は正しい語順で刻するが、その前にある「如雲蔽日」を「如雲蘇日」に誤るといふ不可解なミスを両本ともに犯している。

小字双行の処理については次のような例もある。

例3 第三十三回又批（卷七34 a L5）

舒・余化倚左道之術、傍若無人、以爲無出右其。

清・余化倚左道之術、傍若無人、以爲無出其。

衛・余化倚左道之術、傍若無人、以爲無出下其。

浜・余化倚左道之術、傍若無人、以爲無出其下。

余化は汜水関を守る韓榮の配下の術士で、第三十三回では周に帰順するため関を抜けようとする黄飛虎一家を、戮魂幡という宝物で次々と捕らえる。舒本が小字双行で「其右」に作ることを、本衛藏板本は同じく小字双行だが「其下」に作り、浜文庫本は双行にせず「其下」に作る。舒本の場合、「以爲無出其右（以為えらく其の右に出るもの無し）」という句の主格はおそらく「余化」で、文全体としては「余化は左道の術を頼みに、勝手気ままに振る舞い、方術で自分を上回る者はいないと思っている」という意味になろう。しかし本衛藏板本・浜文庫本の場合、「以爲無出其下（以為えらく其の下に出るもの無し）」は評者の感想であり、文全体の意味は「余化は左道の術を頼

みに、勝手気ままに振る舞っている、思うに彼より下劣な者はいない」となる。「傍若無人」の語は評者から見た余化評であるから、「以爲」以下も余化の自己評価ではなく評者による批評である方が、文脈上の違和感は少ない。清籟閣本の墨格は、舒本の「右」を「下」に改めようと埋木したものの刻字を漏らした可能性がある。

文脈の整合性や文意に関わる修正として、次の例も見てみたい。

例4 第四十二回（巻九16b L10、17a L3）

舒・清…鄧忠等四將咲曰、「太師差矣。……」太師亦大咲不語。

衛 …鄧忠等四將咲曰、「太師差矣。……」太師亦不笑不語。

浜 …鄧忠等四將咲曰、「太師差矣。……」太師亦不咲不語。

殷の太師であり道士でもある聞仲は、周征伐のために進軍する途中、「絶竜嶺」に差し掛かる。かつて師より生涯「絶」の字を避けるよう言いつけられていた聞仲は、不吉を感じ足を止めた。理由を聞いた配下の鄧忠らは、氣にする必要などないと笑い飛ばす。それを聞いた聞仲の反応が「大咲」か「不咲（笑）」か、版本によつて全く逆になっている。前に「亦」字があるから、聞仲は鄧忠らと共に笑い飛ばしたはずで、舒本・清籟閣本の「大咲」が適切である。しかし「不語」と続くところに含みがある。聞仲は不安を拭いきれなかったが、軍の士気に関わると考え、部下に合わせて大笑したのであろう。舒本と清籟閣本の作る「大咲不語」は、このように聞仲の心理を描写しつつ、不穏な印象を残す叙述となっている。本衛蔵板本・浜文庫本がこれを「不咲（笑）不語」としたのは、生真面目な聞仲のキャラクターを意識してのことか、あるいはこの場面の伏線としての機能を強調しようとしたのかもしれない（後に聞仲はこの「絶竜嶺」で絶命する）。

もう一例見てみよう。第四十四回、道士姚天君の呪術により姜子牙は魂魄を抜かれ人事不省となる。そこへ仙人赤精子が救援にやつて来て、周の武王と謁見する。

例5 第四十四回（巻九49b L10、圈点は原文ママ）

舒・清…武王親自出迎。赤精子至銀安殿。赤精子對武王打個稽首。

衛 …武王親自出迎。赤精子至銀安殿。對武王打個稽首。

浜 … 武王親自出迎。赤精子至銀安殿——對武王打個稽首。

舒本・清籟閣本では「武王は自ら出迎えた。赤精子は銀安殿にやつてきた。赤精子は武王に稽首した」と、短文が連続し、主語「赤精子」が重ねて現れる。洗練されていない印象を受ける文章である。本衙蔵板本と浜文庫本は二度目の「赤精子」を削除し、「赤精子至銀安殿」と「對武王打個稽首」をまとめて一文にしている。浜文庫本ではさらに「銀安殿」後の圈点をも削除し、一続きの文章としてより読みやすくなるよう改善を図っている。

以上は四雪草堂系諸本がより良いテキストを目指した修訂の例である。しかし、中には以下のような不適切な改変と言うべき所もある。

例6 第一回(卷一4aL8~10)

舒 … 瑞靄紛紜、金鸞殿上坐君王。祥光繚繞、白玉階前列文武。沈檀鬢鬚噴金爐、則見那珠簾高捲。蘭

麝氤氳籠寶扇、且看他雉尾低回。

清・衙・浜…瑞靄紛紜、金鸞殿上坐君王。祥光繚繞、白玉階前列文武。沈檀八百噴金爐、則見那珠簾高捲。蘭

麝氤氳籠寶扇、且看他雉尾低回。(清・衙、「鸞」を「鸞」に、「爐」を「炉」に作る。)

紂王の朝見を描写した美文で、舒本の「鬢鬚」を四雪草堂系諸本は「八百」に作る。「鬢鬚」は雲のたなびくさまを表す語で、「沈檀(沈香と白檀)」の煙が金の香炉よりゆらゆらと立ち上る形容として、また「蘭麝氤氳」との対としても相応しい。一方、四雪草堂系諸本の「八百」は、香炉より煙が「幾筋も」沸き立つ描写として意味は通じるものの、明らかに舒本に比べ典雅さに欠ける。

なお、これとよく似た美文が、『皇明英武伝』第一則や、『全漢志伝』巻四に見える。

瑞靄齊分、君王端坐金鑾殿。祥雲繚繞、文武起踰白玉階。高捲朱簾、寶鼎沉檀香鬢鬚。低回雉扇、玉爐蘭麝氣

氤氳。(『皇明英武伝』第一則、『全漢志伝』もこれとほぼ同文。)

『封神演義』舒本の美文と語順こそ異なるものの使用語彙はほとんど一致する。『全漢志伝』は万曆十六年(一五八八)、『皇明英武伝』は万曆十九年(一五九二)の刊本が現存しており、これに鑑みれば舒本の美文も万曆年間の早期に成立した可能性が考え得る。『封神演義』本文の成立時期を推定する上でも重要な箇所と言えよう。

もうひとつ情景描写の例を挙げたい。第二十六回、紂王と妲己が雪見をしている場面で、降り積もる雪を描く美文の後、次の韻文が続く。

例7 第二十六回（巻六2 a L7）(10)

舒・清・凜凜寒威霧氣焚、國家祥瑞落紛紜。須臾四野唯分變、頃刻千山盡是雲。銀世界、玉乾坤、空中隱躍自爲羣。此雪若到三更後、盡道豐年已十分。

衛・浜・凜凜寒威霧氣焚、國家祥瑞落紛紜。須臾四野唯分變、頃刻千山盡是雲。銀世界、玉乾坤、空中隱躍自爲羣。此雪落到三更後、盡道豐年已十分。

舒本・清籟閣本は五句目を「銀世界 玉乾坤」と六字句にするが、本衙蔵板本・浜文庫本は四字目に「上」字を挿入し七字句とする。舒本・清籟閣本はこの六字句を三字・三字に分ち間に空格を設けており、本衙蔵板本・浜文庫本はこの空格を脱字と判断して一字補ったと考えられる。すなわちこの韻文を七言律詩と捉えたのである。しかしこの韻文は詩ではなく、「鷓鴣天」詞である。『醒世恒言』巻三十一に、北風と雪を描写する次の「鷓鴣天」がある。

凜冽嚴凝霧氣昏、空中瑞雪降紛紛。須臾四野難分別、頃刻山河不見痕。銀世界、玉乾坤、望中隱隱接崑崙。若還下到三更後、直要填平玉帝門。

これとほぼ同じ詞が『水滸伝』第十回、林冲が富安や陸謙らを殺害して雪中を逃げる場面でも使用されている(ただし詞牌は明記されない)。つまり本衙蔵板本・浜文庫本が「上」を補うのは誤りである。もう一つ注目したいのが、『封神演義』は三句目で「唯」に作るところを、『醒世恒言』(および『水滸伝』)では「難」に作る点である。「分變」は「分辨(見分ける)」の音通であるから、「須臾四野難分變(雪で)たちまち四方は見分け難くなり」とするのが正しいように思われる。実は、織田文庫所蔵の文簡本(表1)の十卷本A)ではこの部分を「難」に作る。あるいは舒本は「難」と作るテキストに基づき、板刻にあたって「唯」に誤ったのではないか。さらにもう一箇所、八句目の舒本・清籟閣本が「若」に作るところを、本衙蔵板本・浜文庫本は同音の「落」に改めているが、『醒世恒言』(および『水滸伝』)の「若還下到三更後」を見れば、「落」への修改は不要と分かる。

韻文・美文は他の文学作品に典故や類例のあることが多い。しかし、以上の修訂を行った人物はそのような知識や認識を持たず、自身の感覚で文字の正否を判断し、改変を加えてしまったようである。それが誰によるものかを特定し得る証拠は無い。だが、文人であり自ら小説の編纂も手がけた椿人獲が、これらの修訂者である可能性は低いように思われる。

(二) 本衛蔵板本・浜文庫本の関係

ここまでの例からも、本衛蔵板本と浜文庫本の近似性が窺えるであろう。では、この両本の間には一体どのような関係があると考えられるか。どちらかの版本が、どちらかの版本を継承または参照した可能性はあるだろうか。本衛蔵板本と浜文庫本に共通する修訂として大変興味深いのが、舒本から数字文字を減じ、同数の文字を増加する、というものである。具体的には次のような例がある。

例 8 第一回 (卷一 9 a L 6 ~ 7)

舒・清…紂王忽然猛省、着奉御宣中諫大夫費仲。 仲乃紂王之倖臣、近因聞太師 奉敕平北海、……

衛・浜…紂王忽然猛省、着奉御宣中諫大夫費仲、 乃紂王之倖臣、近因聞太師仲奉敕平北海、……

例 9 第三十七回 (卷八 21 a L 2 ~ 4)

舒・清…且説、申公豹被仙鶴銜去了頭、不得還體、心内焦躁。 過了一時三刻、血出卽死、左難右難。 且説子牙懇了求仙翁、……

衛・浜…且説、申公豹 銜去了頭、不得還體、心内焦躁。 被仙鶴過 一時三刻、血出卽死、左難右難。 且説子牙懇了求仙翁、……

例 10 第三十八回 (卷八 26 b L 10 ~ 27 a L 1)

舒・清…(聞仲) 正看玩時、見一童兒出來。 太師問曰、「你師父在洞否。」 童兒答曰、「家師在裡面下棋。」

衛・浜…(聞仲) 正看玩時、見一童兒出。 太師問曰、「你師父在洞否。」 此童兒答曰、「家師在裡面下棋。」

例 8 では「仲」の位置が変わり、例 9 では「被仙鶴」と「了」の位置が変わり、例 10 では「出來」の「來」を削

除して「童兒」の前に「此」を挿入している。この種の修訂は大半が本衝蔵板本と浜文庫本とで共通して行われている。ここで注意すべきは、文字位置の移動や削除挿入といった操作が、本衝蔵板本の一行中で行われているという点である。一行二十字の舒本（および清籟閣本）や、一行二十四字の浜文庫本では、複数行にわたる箇所が、一行二十二字の本衝蔵板本では同じ行中に収まる。つまり、本衝蔵板本は修訂に伴う経費を軽減するために、行をまたぐ改刻とならぬよう修訂字数を調整した、と考えられるのである。ただし修訂箇所には字様の差異が見られないので、修訂を施したタイミングは板刻以前、すなわち版下の作成時か、あるいは本衝蔵板本が底本としたテキストにおいて、すでに行われていた可能性がある。

これを踏まえれば、浜文庫本は、本衝蔵板本（または本衝蔵板本の底本）を、十一行二十四字の行款に刻し直したものの、と考えられよう。全体的に本衝蔵板本より修正・改変箇所も多い点も、浜文庫本が後出の版本であることを示している。

この字数調整を伴う修訂は、結果的に不要な改訂となってしまうていたり、理由の不可解なものが多い。たとえば例8の移動された「仲」字は、舒本では紂王の寵臣費仲を指し、本衝蔵板本・浜文庫本では太師聞仲を指す。舒本で「仲」字が連続しているのを符字と見なしたのかも知れないが、この場面で敢えて「聞太師」の名を「仲」と明示する必要はなく、むしろ費仲と聞仲が同名であるために読者の不要な混乱を招きかねず、適切な修訂とは思われない。例10もほとんど意義のない修訂である。聞仲が四聖（王魔・楊森・高友乾・李興霸）を訪ねる場面で、本衝蔵板本・浜文庫本は方向補語「來」を削除し、「童兒」に指示詞「此」を加える。動詞「出」一字よりも「來」を付加して二字句とする方が座りが良いように思えるし、この場面で登場する「童兒」は一人だけなので「此」と特定する必要もない。例9に至っては、修改によって文意不明になっている。姜子牙に申公豹が術比べを挑み、自らの首を刎ねてみせたところ、その首を白鶴が啜えて飛び去ってしまった場面。舒本では「さて、申公豹は仙鶴によって首をくわえて飛び去られ、胴体に戻すことが出来ないの、心中焦っていた。一時三刻を過ぎれば、血が出てすぐに死んでしまい、どうすることもできない。一方の姜子牙は仙翁に懇願し……」となるが、本衝蔵板本・浜文庫本の語順では「さて申公豹は首をくわえて去り……」となり支離滅裂である。何か別の修訂を図ったが、それが誤つ

て反映されてしまったのだろうか。

浜文庫本は、妥当な修正だけでなく、以上のような必要性の低いものや明らかかな誤りまでも、ほぼ全て踏襲している。本衛蔵板本から浜文庫本へという継承関係が想起されるどころだが、ただし、浜文庫本が本衛蔵板本を完全には継承しない箇所も散見される。多いのは単純な誤字だが、次のような意図的と思われる修改もある。

例11 第四十五回（巻九69 a L 2（3））

舒・清…果然見兩個大漢子、不撐船、只用木筏、……

衛 …果 見兩個大漢子、不撐船、然只用木筏、……

浜 …果 見兩個大漢子、也不撐船、只用木筏、……

右は方弼・方相兄弟が黄河の渡しをする際に、怪力の巨漢という特長を生かし、船に棹さすのでなく、綱をつけた筏を引っ張る様子を描いた部分である。舒本を訳せば、「果たして二人の大男を見るに、船に棹ささず、ただ木の筏を用いて……」となる。本衛蔵板本は「果然」を分解して「然」字を「只用」の前に置く。「船に棹ささず、しかなかった木の筏を用いて……」と、筏に焦点を当てることで兄弟の特異性を表現しようとしたのだろう。浜文庫本は「然」を全く削除し、「不撐船」の前に「也」を挿入し、「船に棹ささず」の方を強調している。いずれも文意に大きな差はないが、微妙な表現の違いにこだわった、細かな修訂である。この部分より、浜文庫本は本衛蔵板本だけに依拠したテキストではないことが分かる。

次の例は、本衛蔵板本だけが他本と異なる文字に作る箇所である。

例12 第二十六回（巻六5 a L 2）

舒・清・浜…享皇宮血食、朝暮如常、何不爲美。

衛 …享自善血食、朝暮如常、何不爲美。

姐己が妹分の妖怪雉鷄精を後宮に誘うせりふである。舒本ほかは「皇宮のなまぐさに朝晩となく恵まれるのは、なんと素晴らしいことではないか」の意だが、本衛蔵板本は「皇宮」を字形も音も全く異なる「自善」に改め、「おのずと良いなまぐさに朝晩となく恵まれるのは……」という文にする。異同の理由はよくわからないが、ただ、浜

文庫本が本衝蔵板本以外のテキストに従っていることは明らかである。

以上より、浜文庫本は本衝蔵板本に近く、かつ後出のテキスト考えられるものの、「本衝蔵板本から浜文庫本へ」という単純な継承関係ではないことがわかる。一つの可能性として、本衝蔵板本と浜文庫本は、共通の祖本から生まれたテキストと考えることもできるのではないだろうか。両本の共通点はその祖本に由来し、相違点はそれぞれの修改により生じた、という推測である。本節で挙げた字数調整を伴う修正の例から考えれば、この祖本は、舒本とは異なる行款の、未知のテキストということになる。

(三) 浜文庫本に見える「文簡本化」の傾向

本稿で対象とした四雪草堂系諸本の中で最も後出と考えられる浜文庫本は、紙幅削減を意図した改変や工夫が随所に見られる。他本では挿入詩の前に一行を費やして「詩曰」の二字を記すが、浜文庫本ではこれをほぼ全て削除している(ただし、各回の冒頭詩の前には「詩曰」の一行がある)。また、各回末にある総批・又批を部分的に省略あるいは削除する場合もある。

例13 第六回又批(卷二14 a L5~9)

舒・清…致紂王有炮烙諫臣之名、逐節生出事來、把商家一箇天下送了。究其始、皆此老不寧耐多事起。心經罨所以欲觀自在、故煩惱恐怖罨礙、色相俱忘。眞是養心妙諦。

衝 …致紂王有炮烙諫臣之名、逐節生出事來。究其始、皆此老不寧耐多事之所致也。
浜 …(又批全文なし)

回末批評の削減は本衝蔵板本にも見られるが、浜文庫本の方がより多くの批評を削っている。特に各巻の末尾にある回では批評削減の傾向が強く、例13のある第六回も浜文庫本では巻一の最終収録回である。

甚だしくは、本文中の挿入詩を削除しているところもある。

例14 第一回(卷一8 a L2~8)

舒・清・衝…白光之上懸出一首幡、……名曰招妖幡。怎見得、不一時、悲風颯颯、慘霧迷漫、陰雲四合。但見、

『封神演義』四雪草堂系版本三種について

有詩爲證。詩曰、「善聚亭前草、能開水上萍。揭簾真有義、滅燭太無情。隔院聞鍾響、高樓送鼓聲。只知千樹吼、不見半分形。」風過數陣、天下群妖俱到行宮、……
浜 ……白光之上懸出一首幡、……名曰招妖幡、 …… 不一時、悲風颯颯、慘霧迷漫、陰雲四合。

例15 第四十七回（卷十28bL3〜10）

風過數陣、天下群妖俱到行宮、……

舒・清・衛…（趙）公明大叫曰、「今日你既無情、我與你月缺難圓。」這道人、詩曰、「跨虎臨鋒胆氣雄、圓睜怪目吐長虹。神鞭閃灼遊龍尾、黑虎飛騰起旋風。借來蛟剪稱無價、要奪奇珠立大功。造化不如周主福、千年道行一場空。」話說、燃燈道人見公明縱虎沖來、……
浜 ……（趙）公明大叫曰、「今日你既無情、我與你月缺難圓。」

燃燈道人見公明縱虎沖來、……

例14は女媧が招妖幡で種々の妖怪を呼び出した場面である。浜文庫本は、情景描写を導く「怎見得」と「但見」以下の詩を削除する。また、例15は截教の趙公明と闍教的燃燈道人の対決場面で、「這道人」以下の削除された部分は趙公明の外見や武器等の描写である。

確かにこれらの詩や回末批評などが無くとも、ストーリーを追う上で全く支障はない。このような削減傾向が見られることは、浜文庫本の本文修訂方針が文簡本に近いものであったことを示している。実際に、例15の削除箇所は織田文庫所蔵文簡本の刪節と完全に一致している。浜文庫本は文簡本も参照していたのだろうか。その可能性も皆無ではないが、現在のところ他に例がなく確証は得られない（なお例14の部分は織田文庫蔵本において一切刪節されていない）。いづれにせよ、浜文庫本が部分的であれ文簡本と軌を一にする刪節を行っていることは、該本の刊行時点において、白話小説の読まれ方が舒本とは異なり始めていたことを示しているのではないか。すなわち、清代初期には、ストーリーを追うことが重視され、挿入詩詞や批評などの需要が低下しつつあったと考えられる。

浜文庫本は文繁本から文簡本が生まれる過程を窺わせる点で重要なテキストと言えよう。

四 小結

本稿では、いわゆる「四雪草堂本」と呼ばれる版本群のうち、比較的初期に刊行された清籟閣本・本衛蔵板本・浜文庫本の三種について、各本の修訂態度やそれらの関係性を示す例を挙げた。

第一章のはじめで述べたとおり、舒本との異同は、清籟閣本、本衛蔵板本、浜文庫本の順で多くなっていく。だが、舒本↓清籟閣本↓本衛蔵板本↓浜文庫本という単純な継承関係は存在しない。様々な例で示したとおり、本衛蔵板本と浜文庫本は近しい関係にあり、舒本とは別のテキストを共通の祖本に持つ可能性が指摘できる。浜文庫本がより多くの改訂を施し、また挿入詩や批評の節略も行っていることから、一層後出の版本であることは間違いないだろう。難しいのが清籟閣本の位置づけである。外見上舒本と酷似するため、古い版本のように見えるが、本衛蔵板本・浜文庫本と同じ修訂を施している箇所は、これらのテキスト（もしくはその祖本）を参照した可能性も考え得る。たとえば清籟閣本で墨格となっている箇所は、別字に作る何らかのテキストを参照したからこそ、修訂の必要を認識し改刻しようとした痕跡ではないか。舒本とほぼ同じ版面を持ちながら、李雲翔序を載せず、本衛蔵板本と同じ褚人獲序と周之標原序を掲載しているのも、これらの序文を持つテキストに従ったからではないか。清籟閣本は舒本によく似ているが、単なる舒本のコピーではなく、刊刻時期も必ずしも古いとは限らない。扱いに留意すべき版本である。

本稿で検討したのは『封神演義』全体の半分に過ぎない。第五十一回以降についても、引き続き検証を行いたい。

注

- (1) ただし、該本の徐朔方「前言」によれば、舒本の欠葉部分は「学庫山房本」によって補ったという。該本は九州大『封神演義』四雪草堂系版本三種について

学附属図書館に蔵する。

- (2) 二階堂善弘監訳、山下一夫・中塚亮・二ノ宮聡訳『全訳封神演義』一〜四、勉誠出版。
- (3) 孫楷第『日本東京所見小説書目提要』(国立北平図書館、一九三二年。本稿では『中国通俗小説書目(他二種)』中華書局、二〇一二年版に依拠)の『封神演義』条に「余所見明末清初刊之周之標序本及通行之四雪草堂訂正本」とあるのがおそらく最も早い例。同『中国通俗小説書目』(国立北平図書館、一九三三年。本稿では上掲『中国通俗小説書目(他二種)』に依拠)にも「四雪草堂訂正本封神演義一百回」と記載があり、これが流布したと思われる。
- (4) 于盛庭「褚人獲の生平及《隋唐演義》自序問題」(『明清小説研究』一九八八年四期)による。
- (5) 尾崎勤『封神演義』第九十九回の問題、「汲古」第六十五号、汲古書院、二〇一四年六月。
- (6) 「出版説明」に「本書通行的傳本頗多、其中清初的四雪草堂刊本比較完善一些。……這次印行、存在日本的明刊本既不可得、我們基本上採用了四雪草堂本做底本、並參考了廣百宋齋石印本、蔚文堂本、德聚堂本等加以釐校」とある。
- (7) 『全訳封神演義』完結記念トークイベント(二〇一八年三月二十八日、於八重洲ブックセンター本店)において配布された資料の一部。勉誠出版『全訳封神演義』四のウェブページ(https://bensai.jp/index.php?main_page=product_book_info&products_id=100846)に、「【封神榜比較一覽】トークイベント配布資料再編版」としてPDFが掲載されている。
- (8) フランス国立図書館 Gallica (<https://gallica.bnf.fr>) に公開される書影を使用した。
- (9) 早稲田大学附属図書館蔵本は封面や序文を含む第一冊を欠くが、瀧澤俊亮「封神伝と民族の伝統」(『中国の思想と民族』所収、校倉書房、一九六五年)の記述によれば、周之標序を「原序」として掲載していたことが確認できる。ただし封面については言及がない。
- (10) ハーバード図書館 HOLLIS (<https://library.harvard.edu>) に公開される書影を使用した。
- (11) 書影 URL : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/br/1b9006320z>
- (12) 鄭炳純「古書封面的演變与“本衙藏板”問題」(『社会科学戦線』、吉林省社会科学院、一九八七年二期)、周紹良「談“本衙藏板”」(『細説紅樓』、北京出版社、二〇一五年所収。初出は『書品』二〇〇四年第一期)、沈津「説“本衙藏板”」(『淡江大学中文系、淡江大学漢語文化暨文獻資源研究所主編『昌彼得教授八秩晋五寿慶論文集』、台湾学生書局、二〇

○五年）参照。

- (13) 『隋唐演義』林瀚「原序」は、『隋唐演義』の種本となった『隋唐兩朝史伝』に掲載されていたものとはほぼ同文だが、『時正徳成辰仲春花朝後五日』の紀日を欠く。『隋唐兩朝史伝』は前田育徳会尊経閣文庫に万暦己未（四十七年、一六一九）龔紹山刊本が存する。その刊記において龔紹山は「繼此以後、則有『殘唐五代志傳』詳而載焉」と述べており、この『殘唐五代史演義伝』には周之標の序文がある（拙稿『封神演義』周之標序の検討）、『和漢語文研究』第十八号、京都府立大学国文学会、二〇二〇年十一月参照。『封神演義』の問題を解決しうるものではないが、周之標と楮人獲の接点として、龔紹山という書坊主の存在を紹介しておきたい。

- (14) 『全漢志伝』は「皇明英武伝」の「起躋」を「趨躋」、「朱簾」を「珠簾」に作り、「麝」字を脱する。

- (15) 『皇明英武伝』は万暦十九年楊明峰刊本が内閣文庫に存し、また『皇明英烈伝』と題するほぼ同内容の明刊本（刊年不詳）が中国国家図書館、内閣文庫等に蔵される。引用は『古本小説集成』第四輯所収の影印（『皇明開運英武伝』上海古籍出版社、一九九二年）に拠った。嘉靖年間の権臣郭勛の作という伝承が伝わる（『万暦野獲編』巻五「武定侯進公」条に「自撰開國通俗紀傳、名『英烈傳』者」とある）。『全漢志伝』は『全相平話全漢書統集』および未発見の「正集（あるいは前集・後集）」の後継と考えられる作品で、万暦十六年余世騰刊本が名古屋蓬左文庫に存する。大塚秀高氏の考証によれば、嘉靖三十年代初めに熊大木が原著を編纂し、これを楊氏清江堂が刊行。万暦十六年に余氏が全本として刊行し、その後余世騰が巻四を含む幾許かの部分を増補編纂して合刊。万暦十六〜四十年の間に楊氏清白堂が版木または版權を得て刊刻したという。大塚秀高「講史章回小説の出版と改変——『列国志』をめぐる——」（『中国古典小説研究動態』第三号、『中国古典小説研究動態』刊行会、一九八九年十二月）参照。

- (16) 『皇明英武伝』と『全漢志伝』はいずれも福建で刊行された上図下文本である。無窮会織田文庫所蔵の『封神演義』文簡本も上図下文であり、またその本文が舒本に近いことから、『封神演義』の成立過程を考える上で重要な版本である（前掲尾崎氏『『封神演義』の簡本について』、および拙稿『徳聚堂刊文簡本『封神演義』について』、『中国文学論集』第四十六号、九州大学中国文学会、二〇一七年参照）。これらの上図下文という共通点は非常に興味深い。

- (17) 『古本小説集成』第四輯所収の明葉敬池刊本（『醒世恒言』、上海古籍出版社、一九九二年）を使用した。

『封神演義』四雪草堂系版本三種について

- (18) 『水滸伝』第十回は「凜凜嚴嚴凝霧氣昏、空中祥瑞降紛紛。須臾四野難分路、頃刻山河不見痕。銀世界、玉乾坤、望中隱隱接崑崙。若還下到三更後、彷彿填平玉帝門」(傍線部が『醒世恒言』と異同のある文字)。『古本小説集成』第二輯所収の容与堂本(『李卓吾批評忠義水滸伝』、上海古籍出版社、一九九二年)を利用した。

〔附記〕本論の脱稿後、中塚亮氏より、東洋文庫所蔵の十九巻本①は、本稿で使用した浜文庫本と異なり、第五十一回以降も版心下段に「四雪草堂」と刻されているとご教示いただいた。やはり浜文庫本の第五十一回以降は異版と考えられる。ご教示下さった中塚氏に篤く御礼申し上げます。

本論文はJSPS科研費JP19K20807『封神演義』版本研究——主要版本における本文の継承関係と出版背景の考察——による成果の一部である。